高津区おはなしアーカイブ

●佐々木　郁代（ささき　いくよ）さん

昭和５年生まれ（８３歳）
川崎市高津区二子在住

民生委員２１年　市民館委員８年

◆ご自身について教えてください

生まれたのは厚木です。川崎に転居してきたのは昭和９年の３月、私が３歳のときです。

当時、父親の一番上の兄である、私の叔父が川崎で小学校の校長先生をしておりましたので、教員だった両親をこちらに呼んでくれたのです。父は橘青年学校、母は橘樹郡高津尋常高等小学校（現高津小学校）に勤めました。家には父方の親戚、従姉妹のお姉さんがお手伝いに来てくれていました。私は兄と、弟と一緒に越してきました。下の妹たちはこちらに来てから生まれました。

家は、現在の二子５丁目。５軒並んだ借家の、はじから２軒目の家でした。この当時にしたら文化住宅というのでしょうか、玄関から左右に四畳半、その奥に八畳、廊下があって、突き当たりがお手洗い。お台所とお風呂場があって、結構大きなお家でした。

家の前は道路で、裏はお庭。庭と言っても今のように塀なんかないですから誰でも入れちゃう。垣根はあるのですけど最後で切れていて通れるんですよ。夏はセミ取りとか、子どもが皆ぞろぞろ家の裏を通っていました。家の周りにあった田んぼでは、お米や麦を作っていましたが休耕期にはそこも遊び場になっていて行ったり来たりしていました。

◆小学校時代はどんな思い出がありますか？

私は昭和１２年、高津小学校に入学しました。そのときは「高津尋常高等小学校」です。１クラスは５０人くらいで１学年４クラス。「松」「竹」「梅」「桜」というクラス名です。男女は別々でした。５年生になったときに５クラスに増えました。

昭和１８年から「高津国民学校」と名前が変わり、卒業は「高津国民学校」になっています。

入学した昭和１２年には、支那事変がはじまり、昭和１６年、４年生のときに大東亜戦争がはじまりました。

学校で習ったことで今でも覚えているのは、教育勅語を暗記させられたことです。みんな諳んじて言えるように、覚えさせられました。「朕おもうに、我が皇祖皇宗国をはじむること宏遠に：」とか、なんとか（笑）。もう７０年も昔ですから忘れてしまいましたけど。

高津小学校の運動場の前の方には、奉安殿と二宮尊徳の像がありました。朝礼では毎朝全校生徒が集められ、奉安殿を拝みました

４年生のときには教室が足りなくなって、私のクラスは１年間、講堂の後ろにある図書室を教室に使っていました。５年生のとき、学年の途中で２階建ての新しい校舎ができて、そちらに移りました。

６年生になったとき、真珠湾攻撃に参加した岩佐中佐っていう軍人さんが、関東の方で、高津小学校からも代表が先生に連れられてその方のお宅にまでお邪魔して拝ましていただいたことを覚えています。花輪がおうちの前にあるのです。小さいおうちでしたけど。結局、手柄を立てた兵隊さんを英雄として祀るってことで、子どもたちに戦争のことを教えようとしていたのでしょうね。クラスから２人ずつ代表をだして、６年生のとき私も代表で行きました。

◆小学校卒業後はどちらの学校に？

渋谷にある実践高等女学校（現：実践女子学園中学校）に進学しました。２年生のときから動員され、学校工場で真空管作りをやっていました。それはもう一生懸命でしたよ。お国のためになると思ってね。本当にあの頃は皆すごかったですよ。「早く仕事をさせてください」って、上級生は指を切って血書を書いたとかね。私立の女学校でさえそうだったのですから：。

今日は何個できた、今日はたくさんできたって一喜一憂し、何しろ１個でも多く作って、戦地に送るのだと、そういう気持ちで作業をしていました。そのうちだんだんに材料がなくなっていきました。材料が来なくなるんですよ。そうするとその材料があるだけしか作れないでしょ。状況はだんだん悪くなっていったんですね：。

５月２５日の空襲で学校も被害にあいました。学校が空襲で焼けたその日も、学校に行ったんですよ。こちらからは大井町線が通っていて、自由が丘まで行ったら、東横線が通っていないんです。だけど、何人か一緒にいたので、歩いて行きましょうよって。線路の上を歩いていったのですが、中目黒のところから代官山のトンネルに入るのが怖くて。あのなかがどうなっているか解らないから怖くて入れなくてね。で、線路を降りて、まだ周りが空襲で焼けていて、煙がでているようなところも通って、道に迷いながらなんとか道玄坂までたどり着き、学校に行きました。学校の木造校舎は全部焼けていました。基礎部分の下の方と、コンクリートの校舎は焼け残っていましたが。私たちが作った製品はみんな飛び散って、下に落ちていました。グランドにはいっぱい焼夷弾が落ちて穴だらけ。突き刺さっているのもありました。

天皇陛下の玉音放送は学校で聞きました。外の会社に動員で行っていた人達も、その日はみんな学校に呼ばれ。天皇陛下のお話があるからって、校庭に集まって、専門部の人も一緒に聞きました。そこで詔勅を聞いたのです。音はよく聞こえないし、何を言っているのか全然わからなかったのですけど。でも、先生の様子がおかしいから「あれ」と思って。あ、じゃあ負けたのだって。戦争に負けたんだって思ってね：。先生からは「とにかく家に帰りなさい」って言われました。帰りはどうやって帰ったか、覚えがないのですよ。あまりのショックで：。

次の日から学校はお休みになりましたが、９月１日から学校に来なさいって通知が学校から来ました。９月から学校へ行きましたけど授業もできず、勉強もせず、しばらくは後片付けばかりしていました。落ち着いてくると、むき出しのコンクリートのままで、授業

がはじまりました。窓ガラスもなく、冬の寒いときには皆オーバーを着て授業を受けていました。

その頃、みんな着るものもありませんから、制服も何を着てきてもいいという感じになっていました。戦争中はずっともんぺ。戦後は段々スカートになっていきましたが、全て自分で縫いました。本当にみんな自給自足でしたよね。

終戦後、すぐ下の妹は高津中学校にはいったのですけど、とても勉強ができるところじゃないって、実践女学校に編入しました。私が卒業する年だったので入れ違いです。

◆その頃の高津中学校は荒れていたのですか？

高津中学校はまだできたばっかりで。ちょうど妹の1年上が、はじめて戦後できた新制中学校の1年でした。校舎も日本光学の工場の建屋を使っていました。ぼろぼろで、天井の節穴から、上の階の子が悪戯してものを落とすとか、授業中でもなんでもお構いなしに。だからとても勉強できるような環境じゃなかったって、妹が言っておりました。

◆戦争中の思い出はありますか？

女学校に入ってすぐの、昭和１８年頃。１機だけ米軍機が来たんです。まだ、空襲なんか全然ないときに。この辺りには６２部隊っていうのがありましたでしょ、そして日本光学がある。だからそういうのを偵察に来たんじゃないかと思うんです。そして爆弾を落としていったんです。こちらの二子５丁目のほう、府中県道に近いほうの道。

高津駅の屋根も穴があいたり、家の破片が飛んだり、被害にあった周りにはロープが張られ通行止めになったので、遠回りして家に帰りました。爆弾のひとつは、防空壕の上に落ちたそうなのです。そのおうちのお嫁さんは、空襲が終わっても見つからなくって、お使いに行ったのかもしれないと思っていたら、防空壕のなかにいて亡くなったようです。直撃されたのか、どうなのか子どもだったのでよくわかりませんが：。

爆風で怪我をされた方もあったのでしょう。爆弾の落ちた家は爆風で建物もやられ、お庭にあった敷石が飛んで、隣組の家の床の間に落ちたんです。屋根を突き抜けたそうです。そこの家でも怪我人はでなかったんですけど。私の家は特別大きな被害はなかったんですけど、びっくりしました。

空襲が激しくなってからは、北見方のほうはだいぶやられたそうですね。

３月、東京大空襲のときも東の空が真っ赤になって、見えたんですよ。あの頃は家の前は田んぼでしたから。遠くまで見渡せました、空襲の火で空が赤くなる。３月１０日はすごかったです。東の空が真っ赤になっていました。

５月２５日もそうでした。５月２５日は学校があった渋谷も焼けたときです

母が昭和２０年まで小学校に勤めておりましたので、妹は疎開しなかったんですよ。弟はもう中学生でしたから、動員されて駅の改札で切符切りをしていたとか。勉強をしている場合ではなかったです。

◆家の様子や周りの様子はどうでしたか？

家のそばには六ケ村堀が流れていました。大人でも飛び越せないような幅でした。近所には住宅もありましたけど、家の前も田んぼ、家の裏も田んぼでした。

昔はこの辺りの農家も、堀から田んぼに水を引いていましたが、田植えの頃は堰を作っちゃうんですよね。そして、自分の田んぼに水がくるようにするんです。そうすると下流の方に水が流れなくなってしまうので、鍬を担いで堰を壊しに下流から農家の方がやってくるんですよ。で、堰を壊して帰るんです。そういうのを何回か見ました。

円筒分水ができたのが昭和１６年ですから、その前、まだ原始的に水を分けていたときかもしれません。

現在の、イトーヨーカ堂の方に行く道のそば、梨畑だったところですが、あの道の手前側は、川崎堀の橋があって。そのこちら側には、お家がありました。橋の向こう側は竹藪があり、薄暗くなっていて、昼間でも通るのが怖いくらいで、人はもうほとんど通っていませんでした。

日本光学がありましたでしょ。あれが国の大事な軍需産業で、レンズを磨くのに水が必要だということで、ニケ領用水が再整備されていったと聞きました。この辺りは、曲がりくねっていて、水量もそんなに多くなかったのですが、完成後は水が多く、流れもはやくなりました。

そして私の住んでいるところのそばを通っていたのが六ケ村堀。

六ケ村堀も結構水がたくさん流れていて、お洗濯のすすぎはそこに持っていってやっていました。近所の人たちで洗い場を作っているんですよ。ですけど、二ケ領用水ができてからは、そちらの方が水量も多いですし、水辺に降りられるようにあちこちに階段もついていて、今も残っているところがちょっとありますけど。その階段を降りて、それで、そこで洗濯物をすすぎました。そちらは水の量も多く、流れも強くて、しっかりつかんでいないと洗濯物を流しちゃうこともありました。一人では行かなかったですね。妹がたいていついてきていました。

子どもたちもその川で泳いでいました。胸の辺りまで水があったと思います。円筒分水の工事をしたときに。こちらの二ケ領用水も一緒に工事していたんでしょうね。水が増えて、泳げるようになったんですから。

六ケ村堀も石積みになり、使った石は、わざわざ山梨から運んできたもので、水晶が入っているような立派な石だったようです。大きいのはもちろんないですけど、小さいのが入っていて。「あら、これは水晶だ」って思ってね、びっくりしました。今はもう全部暗渠になっちゃったんですから、あそこはね。

大陸天から線路を越えた向こう側には、私の小学校のお友達もいましたから、その辺はおうちがありましたよね。高津駅の裏の方は、線路のそばに映画館があったんですよ。私も２回くらい見に行ったことがあるんですけど。高津駅のすぐ裏。床屋さんがありましたでしょ、八百屋さんがやめちゃって、ないんでしょうね。床屋さんと八百屋さんの間に、入って行かれるようにそこは広く道になっていて、その奥に映画館があったんです。

二ケ領用水の川下のほうに皆家が建つようになってからは、この辺りにも大中小の工場もいっぱいできてきました。今マンションになっちゃいましたけど。大きな工場の下請け

で、みんなお仲間っていうか。まだ1～2軒残っていますよね

二ケ領用水を掘ったときの土は、トロッコで運ばれて、田んぼを埋めるのにも使われました。家の裏、田んぼがあったところを埋めて、池貝鉄工の寮を建てたんですね。

◆戦後はどのような生活を?

私は、父や母のように学校の先生になるんだと思っていたので、実践高等女学校では教員の免状がとれませんでしたから小学校の先生になるために、大学に行きたいと父に話したら、「まあどこまでやってやれるかわからないけど、行きたかったら行きなさい」って言ったんです。そこではじめて家にお金がないってわかって。でも勉強はしたい、それで都立の高校。駒場の高等科に入りました。その後、学制が6・3・3制になったので、高等科はなくなり、新制高校1期生になりました。都立第三で卒業したんです。

駒場に通っていたとき選択科目で被服をとったら先生がテーラーの襟のスーツの製法まで教えくださったんです。昔ですから接着芯なんてありませんから、襟の部分は芯地と布をハ刺しして作ったんです。すごくあの先生は良かったですよ、役に立ちました。

洋服だって、既製品はほとんど売っていなかったですから。溝ノ口にもいろんなお店があって、闇市もいっぱい並んでいたんですよ。そういうところで気に入った生地を買って、会社に同期に入った女の人とおそろいで作ったり、ドレミの洋裁学校に通ったりしました。

卒業後は、英語科を専攻していて英語が好きだったこともあり、結局英文タイピストになりました。英文タイピストをやっていたことは後々までずいぶん役に立ちました。家で翻訳をやっている方からぜひにと頼まれて、内職もしました。手に職です。あとでみなさんに、あのころの憧れの職業よね、って言われました。

大人になってから、母親に「おまえが働いてくれて助かったんだよ」って言われました。でも、本当は、大学にも行きたくて、結婚してずいぶん経ってから大学に行きたいって言うと、主人に「行けば良いじゃないか」って、言われましたけど…。私たちの年代では女の人で大学まで行った人はほとんどいないんですよ。実践女学校の友達は良い家庭の人が多かったですから、大学まで行った人もいましたけど。でもまだまだ、私の時代は男性社会でしたから。ちゃんと学歴があれば私の言ったことも通るのに、って思ったこともありました。

（平成２５年１２月６日）